

的から離れて農業経営の構造自体が変化し、それに伴って食生活の変化を来したことも大きく影響している。蔬菜単一栽培に酪農を経営内部にとり入れたのも、同様に外部からの影響と内部的な変化がマッチした時に起った。酪農をとり入れた結果としては、土地利用上に牧草（チモシー、レッドクローバー、オーチャードグラス）の作付があらわれている。

酪農は一般的に農業経営の中で果す役割は、酪農專業を除いてはかなり補助的であるが、当地域のように水田経営が困難である場合には、農業経営の根幹となっている。

当地域の現状は、いまだに蔬菜が経営の中心となっているが、酪農をとり入れた混合農業は将来の方向を指示しているといえる。即ち、農業収入が一時的、投機的なものからなり定期的になる。農業労働についても、年内の労働力の配分が計画性をおび有効に使われる。牧草を作付けることによって、農業技術上の難点であった土壌の改良も見通しが明るくなる。

しかし、もちろん明るい見通しばかりではない。統計から、現存の農家（約90戸程）の中に、無所得農家が出ている年がある。この一例ばかりでなく今後に残される問題は多いが、とてい未熟な力では追求が困難であった。

高冷地農業の地理的考察

— 八ヶ岳西麓 —

矢 口 和 代

1. フィールド選択にあたって

地域の選択につきまが考慮したのは、自然条件の過酷な所である。何故ならば土地に於て人間、自然相互の作用によって創出される地域性を把握するためには、厳しい自然条件とそれに対応する人間作用とが、非常に明白に現われる所と考えたからである。

科学の進歩と共に自然条件の絶対性、重要性には変化が見られるが、人文現象に可能性を与えるという点に於て、依然重要な因子であると考えられし、又第一次産業特に農業の面での重要性は、現在に於ても自然がbaseとなっていると認められる。

厳しい自然条件のもたらす制約と人間活動のそれに対する適応、克服を八ヶ岳西麓高冷地農業にみた。

高冷地とは、低暖地に対する語であり、ある高度をもつ低温気象性の土地で高さという地形的要素と、それに伴う低温という気象性要素とが、自然的立地要因を決定している。

2. 内容(項目)

序

I. 自然(自然の地域性の base としての重要性)

一節 気候(温度, 日照, 日射, 降水量)

二節 地形(八ヶ岳火山, 地形区分)

II. 人文

一節 歴史的條件(農業中心)

二節 交通の発達と地域開発との関連

III. 高冷地農業

一節 高冷地の水稻(日本農業の縮図)

二節 養蚕業

三節 高冷地の商品農業(洋菜)

四節 他の高冷地農業経営との比較

(一節, 二節, 三節の組み合わせによる八ヶ岳高冷地農業経営 type の特殊性)

IV. 地域性

結び

以上の項目からなっているが、結論としてこの地域を構成する諸要素に基いて八ヶ岳西麓高冷地の地域の性格を明かにすると、

まず第一に自然条件がある、気温が低く、 10°C 以上の農耕可能の日数が東京に比して100日も少く135日であることから、特に農業に与える影響は大きい、又日較差が大であることから極端な早霜、晩霜の現象が生じ、従って無霜期間も短く農耕に制約を与えている。自然条件にも有利な点もある。それは日照時間が長く又日射が強く水稻に有利となって此の高冷地が長野県主要米作地帯の一部をなしていることから理解される。高冷地が主要米作地帯を形成していることは此の地域の最も特徴とする所である。

次には交通的立地条件である。これは自然条件にも増して重要である。古くから此地方は交通の要所であり、交通立地条件は他の高冷地に比較して恵まれていた。従来他の高冷地は程度の多少はあっても起伏によって隔絶されてきた。延喜の官道、武田氏による山麓横断道(拳道)、江戸時代の甲州街道、明治の鉄道開通とこの地帯は常に交通の先端的位置を占め、この条件が他の高冷地より一歩進んだ土地利用 type を生み出した大きな因子となっている。古くから此地域に商品作物を導入させ、現在では直接、消費市場への自動車輸送にまで発達し、高冷地域の交通立地条件を低冷地域に比し著しく

優位なものとなしている。第三には歴史的な背景である。諏訪地方の歴史は2500年前にさかのぼり出雲族と呼ばれる稲作技術をもった民族の進入は、稲作発展の重要な base となっており、「諏訪余穂」という独自の寒冷地に適する水稻品種をも作り出している。この様に稲作文化をもつ民族の定住を見たということは、他の高冷地との比較に於ても異っている。第四には県民性である。過酷な自然条件に常に研究と努力をもって対処し全国に於て此地域が最も反収をあげているという事実である。又交通の発達とも相俟って他地域との交流が盛んであり、所謂意識が進んでいた。これが製糸業発達の一因ともなり又大正時代からの商品作物導入の原因ともなっている。これら四つが此の高冷地を特徴づける因子であり又これらが組み合わさって非常に特異な高冷地の性格を現出している。

3. 省みて

卒論は4年間の集大成などと意気込み、初期の構想は雄大なものであったが、結局1年間卒論という足枷に終始振りまわされたが、読めば逃げだしたい感じに恐れ、閉じてしまうが如き論文になってしまった。いよいよ自己嫌悪に陥っている次第である。12月25日の締め切りまでの10日程は、全く苦しい闘いであった。しかしこれから研究する機会があったら卒論を手掛りとして何かやりたいと考えているだけでも収穫だったと思う。

戦後開拓地の実態の地理学的考察

— 愛知県豊橋開拓地の場合 —

永 田 悦 子

開拓地は、高冷地開拓と低暖地開拓の二大別が可能であるが、戦後開拓地の特色は、旧軍用地の跡地利用による、都市近郊で交通に恵まれた開拓地があり、戦後にまで残された悪条件の地域とはその性格を異にする。

豊橋開拓地は豊橋市に属し、南部の(明治以降、第二次大戦終了まで陸軍演習場であった)洪積台地、天伯原、高師原上に位置する標高63m~11m、3000haの広域である。本論文はこの典型的な低暖地・都市近郊開拓地の実態の考察を目的とし、地域性の把握に重点をおいた。当開拓地の性格を規定するものは大別して自然条件、人文条件であるが、戦後開拓事業の性格の果す役割が大である為、本論の構成は次の如く、行った。

第一章 調査地域概説

§1 地理的位置